

記 事

例会記録

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・  
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会 合同12月  
例会 平成24年12月8日(土)  
順天堂大学医学部センチュリータワー16階北フロア

1. MRの歴史

——日本最初のプロパー誕生から百年——

西川 隆

2. 口蹄疫の歴史

——その流行と防疫の変遷、現在の課題——

杉浦勝明

3. 伊澤信平と歯科医術

——ハーバード大学に留学した蘭軒の孫——

樋口輝雄

4. 第二次世界大戦におけるビルマの兵站病院と  
日本赤十字社救護班 川原由佳里
5. 江戸時代の労瘵(結核)  
～病にみるジェンダー～ 鈴木則子

日本医史学会1月例会 平成25年1月26日(土)

順天堂大学医学部センチュリータワー16階北フロア

1. 『源氏物語絵巻』と『平治物語絵巻』にみる口  
腔観の比較考察 西巻明彦
2. 日本における精神科医療・医学史研究の歩み  
(その1) ——戦前 岡田靖雄

例会抄録

中島友玄の京遊備忘 其の二

——京遊厨費録より見た遊学生活——

中島 洋一

中島友玄は中島宗仙の長男として文化4年に生まれた。幼名八百吉後金吾、天保元年鴨方藩医武井養貞に譜代弟子願いをして医学を学び、天保4年京都に遊学、吉益北州、清水大学、小石元瑞、藤林泰佑、緒方順節、高階清介に学ぶ。京遊備忘は友玄が天保4年京都に医学を修学のため上京した際の日記で、京遊厨費録は其のときの会計簿である。

日記は天保4年1月26日日より9月5日までで厨費録はその間の会計簿である。友玄が厨費録と京遊備忘を入れて持ち帰った袋には天保4年1月26日出発、12月19日に帰郷したと記されている。

厨費録は道中諸雑費より始まる。7日間の宿料は平均340文となる。

江戸時代の通貨は金、銀、銅の三貨平立しており、金一両は4分、一分は4朱である。銀貨は秤料通貨で銀の重さにより流通した。一貫匁=1000匁、1匁は10分、1匁は3.75g。

友玄は支払った貨幣により分けて記載しており宿料は銀貨で記載し、師家への束脩は金貨で記載している。これは当時の習慣的なものである。天保4年の京都における通貨を計算すると、金1朱は約420文にあたり、銀1匁は92文となる。これから計算すれば金一両は6784文となる。

京地雑貨 京都に到着してからの出費を日を追って記載しているが、母と同行した大丸の買物や、大阪天満祭見物諸経費、独居生活の6, 7, 8, 月諸雑費、外治道具覚、宇治茶土産物買物などは別に明細を記録している。書物覚、諸師束脩覚は京地雑貨の中から別項目で記載している。京地雑貨は生活・勉学のための雑貨が多く、茶碗1組、塗枕、雪駄、下駄、雨傘、丸行灯、朱硯、真書筆、土佐小杉一帖、巻紙など。

2月5日友玄は前以って予約していた福田屋に宿を取り、15日裏門通上長者町に転宅した。裏門通りは2月25日より富小路に移る3月26日までの41日間金三歩二朱払っている。一日143文くらいになる。富小路二条上ルに転宅したのは小石元瑞、吉益北州、緒方惟勝などの塾が近くで、今度は4人同宿である。京遊備忘によれば同宿の道立、養隆、敬二はいずれも友玄と前後して吉益塾に入門している。此処へは6月6日まで下宿している。一人1日80文。

6月4日友玄は母の上洛に備えて淀屋文兵衛貸座敷舗より座敷を借り、6日転宅した。1日154文。6月6日より独居中の生活雑費を別にまとめてある。それまでは賄付きだったので自炊の用意をしている。

7月分の諸雑費は消耗品が主体で、家受け、家賃金を総計から引くと2貫539文、日割りにして約88文になる。

### 天保年間の京都の米価

森鷗外に大塩平八郎という小編があるが、これに天保の大飢饉の米価の記載がある。

江戸では文政年間(1818~1830)100文につき3升であったのが

天保3年(1832)100文につき5合

天保4年(1833)100文につき4合

天保7年(1836)100文につき2合

大阪では

天保7年(1836)100文につき4.9合

天保4年6月友玄は京都で一斗の米に1.066文払っているので換算すると100文につき9.4合となる。

次に厨費録中の遊興飲食費であるが、祭り見

物席料から酒肴雑費、揚弓代、精進屋代などで宿での酒代が多い。

京都での諸師家は吉益北州 古医方。清水大学産科。緒方惟勝(通称順節) 産科。小石元瑞 西洋学(蘭学)。小関亮造(小石元瑞門人) 藤林泰介 西洋学。岡田剛之介 産科 などで吉益北州と緒方順節は京都に行く以前に入門していたようである。小石元瑞、小関亮造、藤林泰佑、岡田剛之介はいずれも京都で友人に紹介されて入門したと思われる。学舎、学塾の訪問回数を調べてみた。吉益会72回 緒方会51回 緒方塾(写書)24回 緒方内術1回 小石会17回 小関会(小石門人)1回 藤林会13回 岡田会16回 岡田内術2回 写書 14回 となる。

### 諸師家束脩覚え

入門式：吉益・二分三朱百文。

緒方・三朱。

束脩 吉益東洞・南涯・北州・南鐮一片(二朱)。

緒方順節・三朱。

小石元瑞・一分・扇子料・小関(亮造)・

小森(宗二)各一分。

岡田剛之介・三朱。

藤林泰介・二朱・扇子料・奥方肴料・知

事山崎各二朱。

謝儀 上巳：吉益・緒方・一朱。

端午：吉益・緒方・一朱。

暑中見舞：吉益・緒方・銀二匁。

盆季：吉益・緒方・岡田・一朱

重陽：吉益・藤林・岡田・一朱。

内術：緒方・岡田・百疋。

蠟燭代 吉益108文、小石が60文。(夜間写書)

### 結語

友玄の京都での遊学生生活を厨費録を中心に追ってみた。宗仙の書簡によれば5月の末頃より帰郷を促されており、日記も9月5日で終わっている。書簡を入れた袋が発見されるまで9月中に帰郷したと考えていた。

友玄は産科の勉強を中心にしていた様であり、特に難産に対する知識と経験は自負するところが

あり、後の診療に散見される。他に蘭学にも力を入れていた様である。種痘に関する知識はこの時得られたと推測する。履歴書には華岡清州の門人高階清介に外科を学びとあるが日記にも厨費簿にも記載されていない。おそらく2度目の遊学に学んだのであろう。

京遊厨費簿を検討してみて、約1年間の遊学生活ではあるがかなり高額な費用が掛かっている。京遊厨費簿はおそらくスポンサーの父宗仙に提出するためと考えられる節が諸処に見られる。所謂公式報告書であろう。

(平成24年11月例会)

## MRの歴史

——日本最初のプロパー誕生から百年——

西川 隆

今日、わが国製薬企業に在籍する現役の認定MRは、63,875名(2011年)を数える。1912年(明治45)にMRの前身である近代的なプロパーが誕生して今年で百年を迎えた。

プロパガンダに由来するプロパーの名称が、国際的に用いられているMR(Medical Representative)に変わったのは1991年(平成3)だが、医療機関を訪問して医薬品の情報提供を行い、それを通して自社製品の普及(販売)を図る目的は、明治末期に誕生して以来、今日までほぼ変わらない。

本報告では、百年の歴史のなかでプロパー誕生の黎明期に焦点を絞り、下記3点について述べる。

### 1) プロパー誕生の背景

明治政府の医療政策のもとで、プロパー誕生には2つの要因があった。1つは、横浜・神戸の外国商館を通じて輸入される洋薬の増加である。すでにこの時期には外国商館に日本人薬剤師が就職し、輸入洋薬の説明書の翻訳を行いながら、国内企業家への販売や病院・開業医へ翻訳文献の送付、さらに直接訪問して、洋薬の普及に乗り出していた。

もう1つは、国内企業家の洋薬指向(輸入・製造)の急激な高揚がある。国内企業家のこうした傾向は、外国商館を通じて購入した輸入洋薬を注文に応じて各地の病院・開業医へ販売することで、急速に財力を増加させた大阪道修町の和漢薬

問屋ご三家(武田・塩野義・田辺)が、洋薬の輸入に止まらず製造・販売へ転換し、自社製品の管理・販売に薬剤師が関わり始めていた。一方、横浜から東京へ進出した三共は、高峰讓吉が特許をもつタカザアスターゼの販売権を獲得、米国パーク・デービス社から輸入、国内における試売を始める状況にあった。

### 2) ドイツ人医師エベリングと日本人第一号 プロパー 二宮昌平

こうした明治末期、自社製品として洋薬の輸入・製造・販売を手さぐり状態で始まるなか、わが国プロパーの近代化に重要な役割を演じたのが、ロシュ社のエベリングと、その指導を受けた二宮昌平である。ドイツ人医師でロシュ本社東洋部次長のエベリングが同社製品「ジガーレン」(ジギタリス製剤)を普及させる目的で、1911年(明治44)春来日。普及するために「医学知識があり、ドイツ語堪能」な日本人薬剤師を必要とした。しかし、そのような薬剤師は見つからず、12月になってようやく大沢道之助(横浜・ドイツ系薬局主任薬剤師)、丹羽藤吉郎(東大病院模範薬局長・医学部薬学科教授)の紹介・仲立ちにより、今日の東京薬科大学を卒業し、東大病院模範薬局で研鑽を積んだ二宮(松沢病院薬局長)と面接、エベリングは即決で採用を決めた。二宮の任務は契約書にWissenschaftliches Propaganda、つまりロシュ